**令和５年度 第５回 岐阜市総合教育会議　議事録**

１　日　時　 令和５年１１月１３日（月）１４時２０分～１６時３０分

２　場　所　 岐阜市庁舎 ６階 ６－１ 大会議室

３　出席者　 柴橋市長、水川教育長、武藤委員、伊藤委員、加藤委員、岡本委員

４　招聘者　 熊本大学 准教授 苫野 一徳 氏

５　傍聴者　 一般１４名、報道関係者１名

６　次　第　 （１）市長あいさつ

　　　　　　 （２）協議

　　　　　　　　　 「未来を自ら拓く力を育む教育の推進

　　　　　　　　　　 ～『ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ』の取組状況と今後～」

７　議　事

（１４時２０分開会）

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

**（１）　市長あいさつ**

**（２）　協議**

**①　事務局説明**

（資料１「リアルを通して生きるをつくる　ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」）

**②　招聘者講演（苫野氏）**

（資料２「何のための『探究』なのか？～『自由』と『自由の相互承認』の実現に向けて～」）

**③　意見交換**

**○横山委員意見（事務局代読）**

令和の日本型教育が目指すところの「全ての子供たちの可能性を引き出すこと」に着目し、岐阜市の教育において追求すべきと考えている。一人ひとりの子どもの成長のテンポは皆違う。何事もテンポよくこなせる子もいれば、じっくりと取り組む子、一生懸命やっているのになかなか成果の出せない子など様々である。そして、走りきる人生の道のり、距離も一人ひとり違う。当然、一人ひとりの子どもが持つ可能性にも違いがある。大事なことは、子ども自身が自分の可能性を知るきっかけをいかにつかむかにあると思う。

私は、子どもたちが他者との比較ではなく、様々な体験の中で自分を知ることが大切であり、この学びの場こそが「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」だと思っている。一人ひとりの子どもが自分に合ったペースでふるさとの本物に触れ、様々な学びの中で創意工夫や失敗をしながら何かをつかむ、そのきっかけに出会うことこそが自分の可能性を認識し、成長につながることになると思う。そして同時に、自分の生まれ育った地を舞台に活躍する人やそこにある事象等すばらしい教材に接することは、郷土を愛する心を育むことにもつながる。また、教員の側からすれば、総合学習の時間という教科横断的な時間での自らの学びを各教科教育にも活かすことによって、教科教育の充実を図ることができる。

私は、このような子ども、教員の育みが期待できる本事業が、各学校で積極的に展開されることを大いに期待している。それが岐阜市の教育のさらなる発展につながると確信しているからだ。郷里を知り、自らを知る本事業が、岐阜人材の育つ場となる。

**○加藤委員**

発達障がいの子たちは、人がつくった道からはずれ、落ちこぼれていく場合もあるのだが、好きなことをやらせると、素晴らしいことができる場合もある。そうした子たちが学校の中で居場所がなくなっていく現状には大きな危機感を抱いている。

今の子どもたちは、知識自体は頭の中にあるのだが、自らの体による体験や学びが少なく、ＡＩのように記号接地ができていない知識ばかりになっていないだろうか。体験の中で疑問が自らの中に湧き上がってくるというシステムはとても大事なものだ。子どもは自ら求め動けるものなのだが、現状の学校ではそれを制限してしまっている。特に小学校低学年では、ご紹介いただいた伊那小学校のように、体験をもっと重視すべきだと思う。日本の将来を考えると、学校での学びの在り方を変えていかなければならないと思う。

伊那小学校は、もともと地元に住んでいる子ばかりが通っているのか、この学校の教育に惹かれて移住してくる家庭の子が多いのか、どのような状況かわかれば教えていただきたい。また、児童全員が同じ方向に向かって探究を進められるのだろうか。私はそれをやりたくない、という子が出てきた場合、どのように対応しているのかわかれば教えていただきたい。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

私たちは、体からではなく頭から学ぶものだと思い込み過ぎているように感じる。本来、子どもたちは体から五感を通して学ぶべきであり、ここをおろそかにすることは、大変危機的なことだと思っている。

伊那小学校はその地域の子どもたちが通う学校だが、メディアで取り上げられる機会が増えて有名となったことで、近年移住者が殺到している。約２０％が移住者の子どもである。校長をはじめとした教員は、こうした状況の変化を逆に学びの機会ととらえ、前向きに取組を行っている。総合的な学習は、皆で取り組む場合がほとんどであり、属性の有無は全く分からない。例えば、ウズラを皆で飼育する活動の中で、一人ひとりに違った学びが起こっている。ウズラが好む砂浴び用の砂をつくってひたすらかけている子がいたかと思えば、その砂が面白く、泥団子ばかりを作っている子がいたりするのである。しかし、教員はそれを注意するのではなく、その泥団子づくりの中に大事な学びがあるのではないかと考え、見守るのである。そしてしばらくすると、砂かけをしている子と泥団子づくりをしている子の活動が重なって、また新たな学びや活動が生まれるのである。このように、一つの活動の中にも、個々の子どもが熱中できる学びや相互作用で生まれる新たな学びが同時多発的に起こっており、それがある種のリズムをもって進んでいく。このリズムの中には、もちろん停滞期というものもある。その時期は、じっと我慢して見守るべきか、あるいは声掛けや仕掛けを工夫して刺激を与えるべきか等、教師の腕の見せ所だ。もちろんこの活動にうまく参加できない子もいるが、私はそういった子は大変少ないという印象を持っている。

**○加藤委員**

おそらく、そこに皆の居場所がしっかりとあるということだろう。そこにいて、そこで何をしていても大丈夫だということが皆分かっているから成り立っているのだと思う。

**○岡本委員**

言われたことをやることや答えのあることに取り組むことが得意な子たちは増えていると感じるが、社会では、答えのないことについて自分たちで考えて結論を出し、進めていかなければならない。そうした場面において、自分の考えや価値観を譲れずに軋轢が生じ、自らの殻に閉じ籠もってしまうことや、逆に相手に対して攻撃してしまうことが見受けられる。幼い頃から自らの意見を積極的に表明でき、またそれが受け入れられる環境であることは、とても大事なことだと思っている。

伊那小学校の取組はとても素晴らしいが、家庭やその先の進学先でも同じようなベクトルで取り組めるものなのだろうか。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

今、こうした大きな学びの変革が起こっているということを、それこそ対話を通して家庭等とも共有していく必要があると思っている。その際、エビデンスをしっかりと示していくことが必要だ。学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合は、一般的な一律一斉の学びよりも圧倒的に学力を保障できる。様々な研究がなされているが、一律一斉の学びの場合、多く見積もっても約５０％しか学んでいない。一方で、個別化・協同化・プロジェクト化の融合の場合は、自分のペースで学ぶことや困った時に人の力を借りることができる。また、自分も誰かの役に立っていることを実感でき、プロジェクトによって学ぶ意欲も担保されていることから、一律一斉よりもはるかに優れた学びのシステムであるといえる。家庭ももちろん大事だが、まずはこうしたことを知らない教員と情報共有する場を設けることが大事だと思う。この個別化・協働化・プロジェクト化の融合は、学力向上に資するものであることから、高校受験に対しても有効であると考えている。高校受験に関しては、在り方そのものを見直す自治体も出てきている。例えば、内申点は重視せず、自分はどういった人間で、どういったことに取り組んだのかを言葉や作品で表現させるといったものだ。弊害もあるだろうが、少しずつ改革を進めていければと思っている。

**○岡本委員**

これまで我々が受けてきた教育のシステム全てが悪いわけではないと思うが、見直しのタイミングにあることを実感した。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

親にとっては子どもの姿が最大の説得力だ。本当に楽しそうに学校に通う姿や熱中している姿を学校でどう実現していくかに尽きると考えている。

**○武藤委員**

先生のお話を聞いて、「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」のよいところ、さらには課題が浮き彫りになったと思う。

自由の相互承認という言葉を初めて聞いた時、非常に感銘を受けたのを今でも覚えている。教育大綱の基本方針実現のためには、まず自分自身が価値ある大切な存在だと思えるかどうかというところがとても大事である。この「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」は、自分の原点、足元を確かなものにすることが最終的なゴールになっており、まさに自分自身を価値ある大切な存在だと思えることに直結していると思っている。さらに、その姿を互いに認め合うことで、相互承認の原理も身につけられるものであり、教育大綱の実現には欠かせない事業だと思っている。また、地域の多様な方たちに関わっていただく取組でもあり、苫野先生がおっしゃった効率的な教育を行うための学年やクラス、障がいの有無による分断の解消にもつながると思う。

課題は、子どもたちが自発的にこうしたいという意思を持つためにはどうしたらよいかという点だと思う。初年度である今年度は、まだ学校側がある程度線を引いた中で、多様な人々の話を聞いて、経験値を積んでいる段階だろう。２年目以降は、この経験をどのように子どもたちの「やりたい」に繋げていけるかが大事だ。各校でカリキュラムを作るにあたっては、そこを意識していただきたい。

**○伊藤委員**

高校生になる娘がいるのだが、中学生の時に「学校教育は民主主義ではないが、それはコスパがよいから仕方のないことだ」と言っていた。苫野先生のお考えに近いものを感じていたのだと思う。こうしたことに教員や地域の方も気づいてはいるものの、あまりにシステム化されていてどうすることもできなかったのではないか。この「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」は、これを打破できるだけのポテンシャルを秘めていると思っている。公教育の構造転換につなげていかなければならない。

いくつかの学校の取組に関わっているが、学校によって温度差があるように感じる。内容をほとんど詰めることなく依頼される学校もあれば、逆に先生が授業の終わり方まで線を引いてしまっている学校もあり、果たしてこれで本当に「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」が子どもたちのためになっているのか懸念している。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

対話の文化・仕組みがベースにあれば、先生のゴールに向かわせ過ぎていないか、といった話が別の教員から出てくるはずだ。そもそも取組を始める前に、何のために「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」をやるのか、何のために探究をするのか、といったことを話すことが大事である。子どもたちが自分たちで問いを立て、自分たちの探究心にドライブされて、まだ誰も知らない答えを自分たちで見つけていくことが価値のあることだということが教員間で合意されていれば、このやり方は違うかもしれないといったことが対話の中で見いだされるはずだ。「対話の文化なくして実りある探究なし」と言っているのはまさにこのことである。

「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」を深い学びにしていくためには、幼稚園の教員や保育園の保育士にも関わってもらうことが有効ではないかと思う。デューイは「人間は、物を作りたい欲求、コミュニケーションしたい欲求、自己表現したい欲求、知りたい欲求という４つの本能的欲求を持っている。」と言っている。学校ではこれらの欲求は抑えられ、いつしか出てこなくなってしまうのだが、幼稚園や保育園ではとても大事にされる。それが幼児教育の基本だからだ。子どもが主語になった対話も非常に多い。学校でも全く同じようにできるわけではないだろうが、幼稚園の教員や保育園の保育士と学校の教員が子どもの姿をとおして話し合うような機会があれば、学校の教員の意識を変えることができるかもしれない。

**○武藤委員**

今のお話を聞いて、「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」は幼稚園も対象にしたほうがよいと感じた。実際に、岐阜市立の幼稚園はそれに近い取組をしており、それを小中学校へつなげることができれば、よりよいものになると思う。

先ほど伊藤委員がおっしゃった、学校の先生とのやり取りの話や、苫野先生の対話の文化の話を伺って、外部の方に参加してもらう場合は、子どもたちのためにしっかりと対話をし、合意して授業に取り組むことが大事だと改めて認識した。岐阜市の法教育推進事業において授業を担当しているのだが、伊藤委員と同じく、学校によって取り組み方に差があると感じている。教員の思いとこちらの思いを対話の中でしっかりと出し合う中で一定の合意ができれば、もっとよい授業になると思う。対話の文化は非常に重要であり、外部の講師と教員との対話はもっと遠慮なくやらなければならない。むしろ、それを子どもたちのためにやるべきだという認識を持っていただかなければならないと思う。この点は、教育委員会から現場に対してしっかり発信してほしい。

**○伊藤委員**

私が講師として授業をする前後の取組や子どもたちがどのような点に興味を持っているか等は各校で異なるはずであり、そういった情報も教えていただきたい。事務局説明にあった、学びのスパイラルをしっかりつなげていくためにも、対話の文化は必要である。また、授業後のフィードバックも頂けると、こちらのステップアップにもつながる。

私は、岐阜市を心のよりどころにしてグローバルな視野で活躍できる子を育てるというこの「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」には非常に可能性を感じており、講師を依頼される身としてどのようにすればこうした子どもたちを育てられるか、まさにそれを私の探究だと思って取り組んでいる。また、このように取り組む大人の姿を子どもたちに見せることも大切なことだと思っている。

**○加藤委員**

本日見学した梅林中学校の授業について、課題としてはとても面白いものだが、自らの意思で決めた探究テーマではないところが課題であると感じた。探究するためには、当事者意識や主体性を持つことが最大のポイントである。

医学教育も、知識習得型からプロブレム・ベースド・ラーニング主体に大きく舵を切った。その際問題になったのが、それを教えられる先生がほとんどいなかったことだ。これは学校現場でも同じではないか。探究的な学びを中核にしていくのであれば、教員同士の対話の練習から始める必要がある。医学教育でまず取り組んだのは、対話の文化をつくることであった。アイスブレーキングに始まり、自己紹介や他者紹介を行いながら、対話をする練習を地道にしていった。

こうした対話は、低学年においても必要である。先生が頭ごなしに注意するのではなく、幼児教育が大事にしているポイントをしっかりと引き継いでいくことが大事だと思う。

**○岡本委員**

本日の授業見学で面白いと感じたのは、子ども一人ひとりが違った点に興味を持って取り組んでいたことだ。例えば、写真の配置や大きさを気にしている子もいれば、文章表現をとても気にしている子もいた。今回は広報広聴課と科学館の方が講師として参加しており、子どもたちがその道の専門家とリアルに触れ合うことができたところはとてもよかったと思う。出発点は、真に子どもたち自らの問いではなかったかもしれないが、取り組む中で出てきた個々の興味や関心をしっかり学びに繋げていくことが必要だろう。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

探究を支えるためには、長期、中期、短期のビジョンが大事である。

長期的には、「遊び浸る」ことを重視すべきだと思う。幼児教育の基本は「遊び浸るから学び浸るへ」であるが、学びに必要なものは、遊びの中に全てあると思っている。自分が夢中になることや粘り強く友達との関係を築くこと、わくわく感を持つこと等だ。遊ぶように学ぶことが本来の望ましい学びの姿であると思っている。探究的な学びとは、まさにわくわくして夢中になっていく学びのことだ。こうした幼児教育の基本を小学校、中学校にも漸次的にしっかりつなげていくことが大事である。

私は「投げ網漁法から一本釣り漁法へ」という例えで述べることが多いのだが、中期的には、子どもたちが様々な刺激に触れる時間、つまり投げ網をする時間がまずは必要であると考えている。しかし、一般的な学校では時間割が決まっており、せっかく伸びはじめたアンテナを伸ばしきれないまま終わってしまうことが多々ある。実現は難しいかもしれないが、１年間はひたすら投げ網だけを行い、自分の好きなものにとことん打ち込む中で伸びてきたアンテナを次の学年以降で一本釣りする、つまり探究していくという方法でもよいと思っている。様々な刺激を受けることではじめて興味のあるものが見えてくるものである。

短期的には、子ども同士の相互触発と本物との出会いを大事にしてほしい。互いの取組に触れることで刺激を受けることや、そこからインスピレーションを受けて、より学びが深まり、新たな問いが生まれることもある。こうした相互触発が起こるような場をいかにつくれるかは大事である。本物との出会いは、学校に来ていただくだけでなく、本場に行ってリアルに感じることも必要だ。本物との出会いを通じてアンテナが急激に伸びることもある。

こうした短期、中期、長期の視点を取り入れながら活動していくことが重要であり、こうした点を学校の中で対話を通して共有していくことが大事である。

**○水川教育長**

委員の皆さんが活発にご発言いただいているのは、何よりもこの「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」をとても後押ししていただいているからだと思う。それは、単に賢い子やふるさとをよく知っている子を育てるのではなく、こどもたち一人ひとりの生き方を磨く教育にしていきたいと常々考えていただいているからだと思う。

「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」を始めるにあたり、小中学校長会において、市立幼稚園の取組を紹介した。それは、日頃から、苫野先生がおっしゃった内容に非常に近い取組をしているからだ。

この「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」は、学習指導要領に基づく学習ではなく、「目の前にあるリアルを対象にすることで、子どもたちの学びはとても豊かになる」と考えて取り組んでいる。子どもたちの生き方を揺さぶっていきたいと思っている。リアルのよさは、必ず体験と「ひと」が伴うところだ。ここに、リアルを通して学ぶことの意味があると思っている。スタートは集団でもよいが、徐々に個の興味にフォーカスしていくような、時間的変容を促す必要があると思っている。また、子どもたちが、正解ではなく、自分なりの確信や納得といったものを見つけることを目標にすることが大事であり、それを誰かに語りたくなるようにしていきたい。誰かに語りたくなるのは、それだけ深い学びができたということだからだ。一方で、課題としては、教員が負担に感じてしまい、思うような取組にならないという点だ。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

リアルの学びに価値があるという点については、学問的見地からこれまで論証され続けている。体験による経験の意義についても多くの研究がなされているが、頭だけの学びは必ず頭打ちになる。

例えば、密度の学習をした子に、非常に細かい金属片を水に入れたらどうなるかと聞くと、浮くと答えることがある。これは体験が伴っていないからだ。子どもは発達段階に応じて体験から多くのことを学ぶ。「ぎふＭＩＲＡＩ’ｓ」のように、様々なところへ出かけ、空気感や音、匂い等、五感を通して学ぶという経験、素地がなければ、学びは必ず頭打ちになる。こうした学びの土台ができていないと、認知科学等でいうスキーマができない。学習理論の基本として、義務教育では、リアルの学びを何よりも大切にすべきである。

子どもたちに身につけさせたい力を長期的な視点で捉えることはとても重要だ。短期的な視点の場合、例えば学力を上げるために、学習規律とドリル学習に固執してしまう懸念がある。これでは子どもの学習意欲ややる気をそいでしまうだろうし、人から言われないとやらないようになってしまう。教育を長い目で見ることは当然のことだが、こうした点についても、対話を通して共有していくことが必要だと思う。

教員が負担を感じないためには、やらされるのではなく、自分たちで企画して取り組むという楽しさを実感することが大事である。伊那小学校のある教員は、自ら行った天然酵母の生育がとても面白く、それをもとに指導案をつくった。そこには「この面白さを子どもたちにも味わってもらいたいが、自分の思いどおりに子どもを動かすのはどうなのだろうか。一度自分の作った天然酵母を教室に置いたらどうだろうか。容器を開けた子がプシュッとなるのを見て、これはなんだ、と天然酵母への興味を持ってくれるかな、くれないかな、こんな学びが起こるかな、起こらないかな。こう考えると私はわくわくする。」といったことが書かれていた。わくわくすると書かれた指導案は初めて見た。つまり、教員がわくわくすれば、どこまででも探究は進んでいく。また、こうした指導案が出来上がるのは、教員間に、共に考え、対話する文化が根付いているからある。

**○伊藤委員**

旅館を経営しているが、対話が増えることで、生産性が上がると感じている。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

それは間違いないと思う。経営者の方々と、よいリーダーとは何か、よい経営とは何か、よい会社とは何か、といったようなテーマで本質観取をすることがあるが、面白いことに、皆で答えを出し合い、対話を通して見つけていくプロセスの中で、皆が納得する言葉が生まれてくるのである。そして、対話を通じたこのプロセスを経ることで、非常に深い部分が皆と共有されることになる。これによって、皆が同じ目線を持つようになり、結果としてチームは非常に強くなるのである。これまでの学校と同じように、上から下へ、というやり方ではなかなか自分事にならないが、一緒に作ることや対話の中で本質を言葉にし合うことで、自分事になっていくのである。これは学校でも全く同じだ。

**○　水川教育長**

教員がコントロールしていることが見えてしまう授業からの脱却が必要だと思っている。子どもの興味関心を伸ばすという視点から考えると、教員は子どもたちが自由に取り組むことを認めつつ、個々の学びの状況に応じてサポートやコーチングをしていく伴走者としての役割を担うべきだろう。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

教育長がおっしゃったような子ども観を皆で共有することがとても大事だ。学校現場では、「子どもの事実を大事にしよう、子どもの事実から始めよう」といったことが盛んに言われるのだが、その子どもの事実をどう見るのかを共有しなければならない。子どもをコントロールするという観点から見ると、「言うことを聞ける子・聞けない子」、「騒がしい・落ち着いているクラス」といった事実認識になってしまうが、そうではない。伊那小学校であれば、「自ら求め、自ら決め、自ら動き出す子」、「自ら学ぶ力を持っている子」、「内から育つ力を持っている子」といった認識になる。コントロールしやすいかどうかという見方ではなく、子どもが内から育つために自分たちはどのように関わればよいか、という点を共有することが非常に大事である。子ども観の共有がなければ、探究は決してうまくいかない。

**○柴橋市長**

探究的な学びにおいて、子ども同士で話し合いや語り合いを行う際、ベースとして一定の知識や情報がなければ、実りのあるものにならないのではないかという疑問を持っている。講演でお話しいただいた「探究は民主主義の大前提であり、座って静かに一方的に学ばされる教育は専制主義の教育である」という点は私も同感である。探究的な学びと知識習得のバランスはどのように考えるべきか。ある程度の知識・情報を子どもが理解した上で、探究的な学びに取組むとよいのか、あるいは、様々な刺激に触発される中で芽生える、興味や物足りなさという気持ちを座学へもつなげていくことがよいのか。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

発達段階によるが、より深い探究をするためには、背景となる知識を有していること等、まさにスキーマができていなければならない。しかし、そのスキーマ自体は、体験によって生まれてくるという点がとても大事である。前提となる知識が真に子どもの必要感から身についたものなのかがとても大事なポイントだ。伊那小学校の例だが、「生まれたばかりの羊の赤ちゃんを死なせたくない」という子どもたちの思いがあるからこそ、乳をどれくらい飲ませればよいのかというところで、自分たちに必要な知識としてミリリットルやデシリットルを学んでいくのである。知識・情報は大事だが、それ自体が本当に子どもの必要性から学ばれているかを考えることが大事だ。そこから探究のループが始まっていくのである。知識を学ぶために探究があり、その探究から知識がより増えていき、次の探究につながっていくというこのループを回していけるよう、学校教育の環境を整えていくべきだと思う。

**○柴橋市長**

小学１年生から中学３年生までどのように探究のループを回していけるかが重要であり、そこがまさに教員の腕の見せ所であるということなのだろう。先日の研究授業や本日の梅林中学校の授業もそうだが、指導案やカリキュラムがとても細かく組み立てられていて非常に驚いた。あまりにも細かくしてしまうと、教員はそれに子どもたちを当てはめようとしてしまうだろうから、子どもたちの興味や様子によって進む方向が変わっていくということを理解した上で、伴走者として見守っていくことが大事なのだろう。

**○熊本大学 准教授 苫野氏**

教員は、指導案やカリキュラムを細かく組み立てることで、「しっかり学ばせている、教科書を終わらせている、指導要領をこなしている」という安心を感じるだろうが、計画通りにカリキュラムをこなしても、実際に子どもたちが全てを習得していることはありえない。そうではなく、さきほど述べたように、子どもたちの学びやプロジェクトがまずあって、そこで学んだことを学習指導要領の内容に当てはめていくといった、後追い型のカリキュラムや評価ができるよう、思想を転換していくことが必要である。そして、この転換をするためにはどうすればよいのか、という対話が必要となるのである。

**○柴橋市長**

子どもたちのために、教員がカリキュラムをしっかり組み立てていただいていること自体はとても尊いことだが、それにあまりにも縛られ過ぎてしまうことに疑問を感じていたところだったので、とても参考になった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

（１６時３０分閉会）